

ぷらす

出居清太郎ワールドへのご招待

No.102
2016・春

人のことを先にする

(1) 大晦日と正月餅

大晦日の夜であった。貧しい老婆が来て、くどくどと泣き言を並べた。年の瀬も押し詰まったのに主人や倅に働きがなく、越すに越せないと言って泣いた。そばで聞いていた妻の菊のが、「お婆さん、これ持ってお行き…」と言って、四十切れほどの切り餅を風呂敷包みにして渡した。老婆はうるたえた。「いえ、そんなつもりで申したのではございません。それではあまりに…」私たちのことならいいのよ。いくらでもあるの

だからね。」実はそれが正月餅のすべてであった。

正月できぬと言って嘆く人と、自分の正月をすっぽり人に与えて喜んでいる人と、そこに二つの人生があった。

餅はなくても元日はやって来た。いつものようにご飯とお汁、少しのお煮しめだけでお祝いをしていると、一人の会員が挨拶に来て、鏡餅を置いていった。

(出居清太郎先生の言葉から)

これは出居清太郎先生と菊の夫人が結婚されて（昭和 4 年）間もないころのお話ですが、お二人は自分たちが貧しい中にも、自分たちのことはさておいて、目の前に現われた困っている人、苦しんでいる人たちに対して、物も心もすべてを捧げ尽くされました。窮乏の底にあった身寄りのない老夫婦、しかも夫人が中風で倒れた老夫婦を家に引き取ってお世話をされるということもありました。

その頃のことを先生は次のように述懐されています。

「若い元気のよい私は、弱い困っている人々に、己が肉を裂き、血を与えていくことにただ喜びをおぼえておった。今日裸になってしまえば明日はどつとなるであらうかと考えたこともなかった。ただ

無条件に与え放しでよいのであった。毎日、「一」に立って、「一」から新しく進んだ。」

「その頃の人々はほとんど散ってしまい、今は跡形もない。しかし私と菊との魂に刻み込まれた刹那、刹那の感激は、永劫に消えることなく生き続ける。これが魂の輝きであり、徳である。」

そしてその姿勢を生涯貫かれました。

ただただすごいなと思います。とても真似することなどできないでしょう。ただ、自分さえよければよいというのではなく、「自分のことは後にして、人のことを先にする」「姿勢を忘れないようにして、一つでも、小さなことでも、人のことを先にする行いができるよっ心掛けたいものです。」

(2) 乗り合わせない

私は電車と飛行機と自動車に乗りづめで全国を巡っている。地方に行くとき必ず「先生、いつもご無事で…」と挨拶を受ける。中には「先生が事故に遭われることはないでしょうね」という人もある。そんなとき、「私は事故を起こすような車や飛行機には乗り合わせません」と答える。

(出居清太郎先生の言葉から)

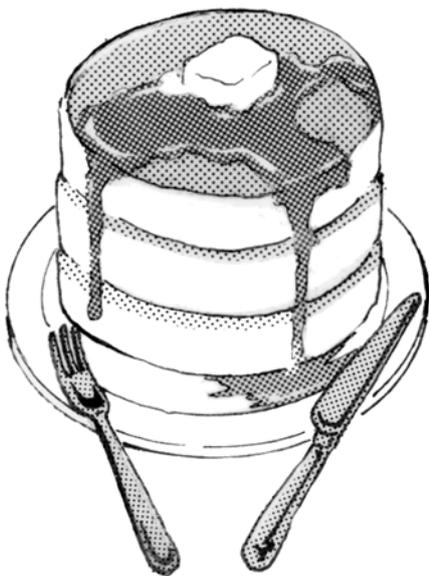
「先生が事故に遭われることはないでしょうね」と言つた人の気持ちは、先生のような立派な方が乗った車は、きっと神様に守られていて事故に遭ったりはしないだろう、というものでしょう。

それに対して先生の答えは「事故を起こすような車には乗り合わせない」といつも

のでした。

この二つは事故に遭わないという結果は同じですが、その根拠がまったく違います。「私が乗っていれば大丈夫」というのは整備不良の車であろうが、スピード違反をしようが、信号を無視しようが事故に遭わないと言っているようなもので、根拠のない思い上がりでしょう。

誰が乗っていようがいまいが、事故を引き起こす原因を持った車は事故を起こしま



カッパ 齋藤啓子

す。ところで、その原因が生じるまでの人
いるのではないでしょうか。

編 集 後 記

や物の動きは実に複雑で、長い時間の経過
があります。また、人がその車に乗るに至
る経過も実に複雑であり、言ってみればそ
の人の生まれてからそれまでの人生の集
約とも言えるでしょう。さらにはこの世で
はない世界も視野に入れることも必要で
しょう。

春一番が吹いて汗ばむ陽気と思えば、次
の日は一転冬日に逆戻りと激しい変動で
す。気温に限らず、日本の経済も、世界の
情勢もあちこち騒がしく、なにやら波乱含
みです。慌てず騒がず、冷静に見つめなが
ら、自分の生き方をしっかり考えたいもの
です。

車と人のそれまでにはそれぞれに複雑
な経緯があり、その両者が出会うか出会わ
ないか、それは偶然に決まることではなく
て、そこには厳然とした秩序があるのだ、
ということをお先生の答えは教えてくれて

次号は10月1日発行です。(H・Y)

平成 28 年 3 月 1 日発行 ふゆのあり 675 号付録 ぷらす α 平成 28 年春号(通巻 102 号) 編集人 山本博也

発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町 3-11-1 修養団捧誠会壮青少年委員会 TEL03-3397-11493